

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04154

研究課題名(和文)薬物依存者の「回復」コミュニティのミクロ社会学的研究

研究課題名(英文)A micro-sociological study of a "recovery" community of drug addicts

研究代表者

南 保輔 (Minami, Yasusuke)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：10266207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：薬物依存の専門職支援者は、自助グループの12ステッププログラムと当事者であるダルクスタッフを信頼して、提供するサービスの切り分けを行っていた。薬物依存の生み出す問題の深刻さと回復の困難さは、日本の大都市と地方都市、あるいは、司法による取り締まりのきびしい日本とヨーロッパ諸国などを比較してもそれほど変わらないという見通しが得られた。薬物依存者の認知行動療法プログラムのひとつであるSMARPPは、「言いつばなし聞きつばなし」の自助グループミーティングよりも、回復初期段階の利用者に肯定的に受けとめられていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

薬物依存の専門職支援者を対象とする社会学調査はこれまでに実施されてこなかった。また、薬物依存者の認知行動療法プログラムの相互作用分析もこれまでに行われたことはない。いずれも初めての研究成果となる。海外の薬物依存からの回復者にたいする社会学調査もほとんどなされていない。今後の国際研究、比較研究が求められる分野である。

研究成果の概要(英文)：Professionals providing support for drug addicts in Japan are found to respect 12 STEP program of self-help groups and recovering DARC staff members. They think their job is to provide medical services and guide clients towards attending NA meetings and going to DARC. Drug addictions cause addicts serious problems and recovery is hard to achieve. This fact seems common between big urban areas and small country towns in Japan. It looks also the case when comparing Japan, which has "zero-tolerance" drug policies, and some European countries, which have more tolerant drug policies. SMARPP, a cognitive therapeutic program for drug addiction, is found to be more positively evaluated by those who have just started recovery program than no cross-talk meetings of self-help groups.

研究分野：社会学

キーワード：薬物依存 回復のワーク ダルク 自助グループ 専門職支援者 SMARPP 認知行動療法

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2011年からのダルク研究会の調査研究を通じて、薬物依存について以下の点を明らかにした。薬物依存からの回復は可能である。だが、その回復プロセスは長く起伏に富んでおり、依存者ひとりひとりユニークで多様なものである。薬物依存からのリハビリテーション施設であるダルク (Drug Addiction Rehabilitation Center, DARC) は、回復初期段階の居場所として適切な支援を提供していた。

ダルクのスタッフも当事者であり、回復途上の薬物依存者である。スタッフのインタビュー調査の結果、スタッフとなった経緯として、ダルク施設長などから誘われたひとと自分から希望してなったというひとがいた。ほぼ全員が、自身の回復にダルクスタッフであることが大きく貢献していると考えていた。とくに、自助グループである NA (Narcotics Anonymous) の 12 ステッププログラムの重要性を全員が強く感じていた。ダルクスタッフという生き方は、薬物依存からの回復の中期以降のひとつのありかたであった。

### 2. 研究の目的

薬物依存者の回復コミュニティの全体像を明らかにすることを目的として、4つの柱を設定した。(1) 専門職支援者調査、(2) 地方ダルクと海外治療共同体調査、(3) ミーティングの相互作用調査、(4) Xダルクと Yダルクの利用者とスタッフのフォローアップ調査、である。

### 3. 研究の方法

#### (1) 専門職支援者調査

薬物依存者を支援する専門職 10 人にインタビュー調査を実施した。内訳は、精神科医師 4 人、弁護士 1 人、保健師 1 人、看護師 1 人、臨床心理士 1 人、精神保健福祉士 1 人、保護観察官 1 人、である。

#### (2) 地方ダルクと海外治療共同体調査

日本国内の地方ダルク 2 か所を訪問し、スタッフと利用者にインタビュー調査をおこなった。ヨーロッパの薬物依存回復者 3 人とオーストラリア在住の家族 1 人の調査協力を得た。ヨーロッパにおいて開催された薬物依存回復者の集まりである NA コンベンション (ECCNA 2019) に参加し、多くのスピーチを聞くとともに交流の様子を観察した。また、ヨルダンの薬物依存治療施設を訪問見学した。

#### (3) ミーティングの相互作用調査

ある施設において 17 回にわたり実施された認知行動療法プログラムの様子を観察し記録するとともに、参加者にインタビュー調査を行った。調査記録を元に、データ検討会を実施した。

#### (4) Xダルクと Yダルクの利用者とスタッフのフォローアップ調査

両ダルクを訪問し、スタッフと利用者のインタビュー調査を実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 専門職支援者調査

薬物依存者支援の経験が 5 年以上と長いひとが多かった。それぞれの専門領域において、薬物依存者というクライアントは少数派であるが、そういったなかで自ら薬物依存者支援を選択していた。依存へいたる「生きづらさ」に共鳴し、回復において正直さを追い求めるすがたに共感していた。とりわけ、薬物依存からの回復が長いプロセスであること、依存と回復の当事者であるダルクスタッフによる支援を必須で不可欠とするということ、そして、自分たちの関わりは専門領域に特化したものであるべきだということ、という認識が共通していた。なかでも精神科医は、回復初期、あるいは再発の危機への対応が自分たちのしごとであること、そして、生活全般についてはダルクスタッフと自助グループ NA の果たす役割の大きさを認め尊重し、病院からダルクと NA につなげることを最重要視していた。

#### (2) 地方ダルクと海外治療共同体調査

東日本の地方にある Pダルクと西日本の地方都市にある Qダルクを訪問調査した。Pダルクは市街地からの交通が不便な場所に立地するという条件を活かして、断薬が困難な再発者を中心に受け入れていた。デイケアとナイトケアが一体の施設であることから空き時間、すきま時間が多い。この時間を活用して、音楽活動に力を入れていた。大都市の生活で再使用となった利用者のインタビューからは、Pダルクの環境と生活を受け入れて新たな回復に取り組んでいるすがたを見ることができた。

Qダルクは、地方都市の町中にある。規模は小さいもののスタッフの人員は多い。調査からは、薬物依存の問題には大都市と地方都市とのあいだに大きな違いがないということがわかった。プログラムは NA の 12 ステップを中心としており、新しい取り組みを積極的に取り入れている Pダルクとは対照的であった。ダルク創設者近藤恒夫の影響をどちらの施設長も強く受けていたが、施設運営において大きな違いが見られたことは興味ぶかい。

ヨーロッパにおいてインタビュー調査への協力を得た薬物依存当事者はフィンランド人 1 人とポルトガル人 2 人である。いずれの国においても違法薬物の使用を理由として法的に処罰されることはない。それにもかかわらず、薬物依存のために生活がちいなくなり、NA につながることを通じて回復しているという点は 3 人に共通していた。オーストラリアでインタヴュー

一調査を実施した薬物・アルコール依存者の家族は、日本人であり、依存者である息子を回復のために日本のダルクに入寮させていた。オーストラリアの病院では解毒サービスはあるものの、それ以上の制度的支援を見つけることができずに絶望していた。オーストラリアで実施されているハームリダクションの施策にたいしてこの女性は懐疑的であった。このような評価が聞かれる背景を深く理解するためのていねいな体系的比較調査の必要性が感じられた。

ヨーロッパの NA コンベンションにおいては、当然のことではあるが、日本の NA コンベンションと多くの共通点が見られた。NA ではフェロウシップが重視されるが、たがいに抱き合っただけで再会を喜びあう光景が多く観察された。とりわけ、回復歴の短いメンバー（「ニューカマー」）をたいせつにする実践が随所で観察された。他方、日本の「アノニマスネーム」の使用や、「言いつばなし聞きつばなし」というミーティングのルールが、国際標準ではなく、日本独自のものであるという可能性への気づきも得られた。これも、今後の調査が求められる点である。

ヨルダンでは隣国シリアからの薬物流入が問題となっていた。イスラム教国でありながら国営の薬物治療施設を持つところもユニークであった。

### （３）ミーティングの相互作用調査

SMARPP は、精神科医松本俊彦博士が中心となって開発した薬物依存再発防止の認知行動療法プログラムである。16 回版や 24 回版がある。薬物依存リハビリテーション施設の施設 A において 2018 年前半に実施された 16 回プログラム（実際には 17 回となった）を録画録音するとともに、参加者にインタビューするという調査を実施した。施設での活動のメインである「言いつばなし聞きつばなし」ミーティングとの比較を求める質問もおこなった。

観察とインタビューから、「回復のワーク」と呼ぶべき実践を見出した。薬物の使用欲求が生じたときに、深呼吸をする、水を飲む、「輪ゴムパッチン」をする、眠るなどの具体的行動を取るべきことを知っていた。さらに、欲求の強さを 100 パーセントのうちのどれほどの数値と評定するかにかかわる戦略とモニタリングも行なわれていた。

回復経験の長いひとのあいだでは SMARPP より「言いつばなし聞きつばなし」ミーティングが高く評価された一方、回復経験の短いひとは SMARPP のほうがやりやすいと感じていた。SMARPP の役に立つところとして、テキストから得られる薬物依存のメカニズムや回復のための実践的な知識と、SMARPP が毎週 1 回決まった時間に行われたりテキストに書き込みをしたりできるという形式性が挙げられた。SMARPP と「言いつばなし聞きつばなし」ミーティングの組み合わせが効果的であると感じている参加者もいた。施設のスタッフは、その回復プログラムに SMARPP を取り入れていることの利点を感じていた。

ミーティングの相互作用調査では、過去の発話を直接引用する再演（replay）発話の事例を検討した。自身の体験を臨場感豊かに物語る手法として使われている事例が見られる一方、自助グループにおける「言いつばなし聞きつばなし」というミーティングルールを尊重するための方策として、物語実践とそのなかでの再演発話の使用とが観察された。具体的には、「自分の話をする」という規則にのっとって、発言したメンバーのエピソードとほぼ同じといえる自身の体験を語る事例が見られた。

薬物依存者たちの日常の回復実践の詳細な記録は当事者による体験記をのぞくとほぼ皆無である。「言いつばなし聞きつばなし」ルールがその大きな壁となっている。SMARPP ミーティングは代替の調査フィールドを提供するものであり、データ源として豊穡であること、そして今後さらなる調査が必要であることが確認された。

### （４）XダルクとYダルクの利用者とスタッフのフォローアップ調査

かつて、ダルク研究会は 14 人のダルク利用者の回復のかたちをまとめた（ダルク研究会 2013）。調査協力を得た 2012 年の時点でこの 14 人は薬物やアルコールの使用が止まった「クリーン」の状態であった。約 7 年が経過してこの 14 人のその後を調べたところ、2019 年末の時点で消息がわかる 12 人のうち、再使用がなくクリーンが続いているのは 4 人のみであった。1 人は逝去し 1 人は消息不明である。残りの 8 人は薬物あるいはアルコール使用があった。刑務所に入ったひとが 3 人いた。

14 人のうちの 1 人には、縦断的追跡調査を継続し、計 7 回のインタビューを行った。現在スタッフを務めるなかで、ギャンブルへの依存や親族の不幸など回復に向けたさまざまな困難がありながらも、仲間とのつながりを保ちつつ、困難を克服するための自己物語を紡ぎ続けることで、困難を乗り越えていることを見出した。仲間とのつながりやミーティングでの自己物語の構築といった回復初期に必要なとされる実践は、回復中期以降においても重要な役割を果たしていることが示唆された。

また、65 歳以上の高齢でダルクを利用している 2 人にインタビューを行った。薬物依存のために家族との関係が絶たれて独り身である。高齢の回復者を支援する体制づくりの必要性が感じられた。

（了）

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 南 保輔	4. 巻 30
2. 論文標題 薬物依存者リハビリテーション施設におけるSMARPP：フィールド調査に見られる効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 コミュニケーション紀要	6. 最初と最後の頁 13-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 相良 翔	4. 巻 1
2. 論文標題 薬物依存からの「回復」に関する社会学的研究 ダルクにおけるフィールドワークを通じて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中央大学大学院博士論文	6. 最初と最後の頁 1-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 南 保輔	4. 巻 240
2. 論文標題 ターニングポイントはポイントではなくプロセスである：薬物依存からの回復における「労役経験」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 432, 417
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 南 保輔	4. 巻 29
2. 論文標題 スタッフを続けるのもおまかせ：ダルクスタッフAさんのライフストーリー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 コミュニケーション紀要	6. 最初と最後の頁 13, 40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 相良 翔・伊藤 秀樹
2. 発表標題 離脱パラダイムが見落としているもの ダルクで「回復」を目指す人々へのインタビューより
3. 学会等名 日本犯罪社会学会第45回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 南 保輔
2. 発表標題 当事者が支援するということ：専門職支援との対比調査に向けて
3. 学会等名 日本社会学会第90回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 南 保輔
2. 発表標題 矯正教育および依存からの回復研究の知見から
3. 学会等名 第49回日本医学教育学会大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 南 保輔
2. 発表標題 シクレル・インタビュー・アイデンティティ：『インタビューのエスノメソドロジー』に向けて
3. 学会等名 EMCA研究会秋の研究大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村 英代
2. 発表標題 コントロールを手放す 変えられないものを変えようとし続ける私たち
3. 学会等名 東京大学・こまば当事者カレッジ主催（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村 英代
2. 発表標題 依存症への臨床社会学からのアプローチ
3. 学会等名 大阪大学倫理学・臨床哲学研究室主催（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村 英代
2. 発表標題 依存症における病いの語り - ナラティブ・アプローチの立場から医療者に伝えたいこと
3. 学会等名 第6回ナラティブ・コロキウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sho Sagara
2. 発表標題 What is the “ Role ” of the Drug Addiction Rehabilitation Center (DARC)? : Focusing on the Narratives of DARC ' s Staffs
3. 学会等名 11th Asian Criminological Society Annual Conference ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 中村 英代	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 24
3. 書名 自己語りの社会学 ライフストーリー・問題経験・当事者研究（小林多寿子・浅野智彦編8章「私利私欲を手放し、匿名の自己を生きる 12ステップ・グループと依存症からの回復」）	

1. 著者名 森 一平	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 22
3. 書名 自己語りの社会学 ライフストーリー・問題経験・当事者研究（小林多寿子・浅野智彦編9章「人生が変わるとき 薬物依存からの『回復』語りとライフストーリーの理解可能性」）	

1. 著者名 伊藤 秀樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 20
3. 書名 自己語りの社会学 ライフストーリー・問題経験・当事者研究（小林多寿子・浅野智彦編7章「薬物をやめ続けるための自己物語 再使用の危機に直面したダルクスタッフの語り」）	

1. 著者名 南 保輔, 中村 英代, 相良 翔, 森 一平, 伊藤秀樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 270
3. 書名 当事者が支援する：薬物依存からの回復 ダルクの日々パート2	

1. 著者名 相良 翔	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ちとせプレス	5. 総ページ数 288
3. 書名 薬物依存からの「回復」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	相良 翔  (Sagara Sho)  (40736469)	埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教   (22401)	
研究分担者	中村 英代  (Nakamura Hideyo)  (50635191)	日本大学・文理学部・教授   (32665)	
研究協力者	岡田 光弘  (Okada Mitshuhiro)		
連携研究者	森 一平  (Mori Ippei)  (90600867)	帝京大学・教育学部・准教授   (32643)	
連携研究者	伊藤 秀樹  (Ito Hideki)  (80712075)	東京学芸大学・教育学部・講師   (12604)	